

島原松平文庫蔵『仮枕』翻刻

花田, 富二夫

<https://doi.org/10.15017/4741876>

出版情報 : 雅俗. 4, pp.143-183, 1997-01-31. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



島原松平文庫蔵『仮枕』翻刻

花田 富二夫

序 言

はじめに

島原図書館松平文庫に、近世前期筆写と推定される写本『仮枕』（図書記号 松一一六／二三）が所蔵されている。本書に関しては、既に中村幸彦、今井源衛、島津忠夫三氏による紹介（『文学』一九六二年一月号）がそなわり、多くの方により関心がもたれ、調査されてもきた。だが、その作者や執筆時期などは、現在に至るも、まだ、判明していない。本書が近世初期における未刊仮名草子作品として、いったいどのような位置を占め、またその作者像はいかなる人物であったのか。重要な課題が残されているが、本稿では、ここに全文の翻刻をなし、今後の解明に期したいと思う。

底本について

底本の書誌的事項はおおよそ次のようである。

大本 袋綴 二卷二冊 縦二七・三糎 横一九・五糎 香色原表紙

題簽 「假枕 上（下）」（墨筆）

字高 二〇・七糎 行数 半丁九行、毎行十五字前後

紙数 上卷全五十八丁 墨付五十四丁（内、序三丁／目録五丁／本文四十五丁半）・遊紙四丁（序へ一オ前、

目録へ四オ前、本文へ九オ前、本文へ54ウ後）

下巻全六十二丁 墨付六十丁・遊紙二丁（本文へ1オ前、本文へ60ウ後）

印記 下巻の末に、「尚舎源忠房」（陽刻）「文庫」（陰刻）の二顆

なお、本書には墨筆（別筆）による見せ消ちが存し、主になか遣いを修正しているが、本文の誤りを正している箇所も見える。その中で、上巻十二丁裏四行目には「こはしら」という不可解な語句が見えるが、この「こ」の文字を、見せ消ちは「二」と訂正しており、「二」の方が正しい。このことは、本書筆写者が原文の「二」の文字を、類似した文字の「こ」に写し誤ったものと推測される。この推測が許されるなら、現松平文庫本は、なんらかの原稿からか、もしくは他の親本からの筆写本であった可能性が高い。他に伝本の存在を聞かないため、推測の域を出ないが、本書も他本と同様、忠房下命による筆写本作成書の本本であったと言えようか。

内容付記

作者に関しては、本文を一読した限りでは、殆どその手掛かりを見出し得ない。わずかに、五十歳を過ぎた老人であること（序文）、かつ、各地を訪れていること（6の2「小余綾磯 五十にあまりしとを」と）などを、知るのみである。内容は、物は尽しの体裁で、掲載された大項目、全二十四条。それぞれが小項目にわかれ、各項は長、短さまざま、また和歌のみの場合もあり、全百四段から成り立つ。

序文に記すように『枕草子』風の構想を有するが、文辞、テーマの面では、『徒然草』をも範としたようだ。ひとまず、その関連について、関係ありそうな段落を記しておく。

『徒然草』

『仮枕』

第五段 配所の月

22の2

七段 四十にたらぬほどにてゝ

10の3

八・九・一一三段（老の）好色

1の4

一〇段 木立ものふりて

21の1

一四段 古今の序

4の1

二五段 飛鳥川、淵瀬

9の2

三五・一二二段 手のわろき・手を習う
三八段 名利をもとむるは愚か
賢きは位を降り

金は山に捨てゝ

七九段 よくわきまへたる道には、必ず口重く

一〇八段 命を終ふる期、忽ちに至る

一二九段 病受くる事も、多くは心より受く

一三四・一七二段 老いての交わり

一五〇段 能をつかんとする人

一五七・五八段 心は必ず事に触れて・心は縁にひかれて

一七〇段 さしたる事なくて人のがり行くは

一七二段 身を誤つことは、若き時のしわざなり

一八八段 若き時は諸事につけて、身を立てゝ

二二一段 奴ゝそむき走る事あり

詳細は略すが、中には引用文辞の一致などもあるものの、総じて、『徒然草』の単なる引き写しではない。『徒然草』の素材や教訓的テーマを借り受け、大枠でそれらを用いつつも、当時の世話的表現や、俗説、故事を利用して、あくまでも自己の作品として構成しようとしていることがうかがえる。最後の7の7は、その象徴でもあろうか。へ奴のそむき走る事へに關しては、『徒然草』に何ら具体的な記述はないが、作者はその該当文に着目し、これを項目として採用し、新しく創案したものと考えられる。

また、本書には漢語句や故事の利用も見られるが、それらの出所は、1の1・「足ることを知る」(老子三三)、2の2・「富貴は天にあり」(論語顔淵)、2の4・「この人にこの病あり」(論語雍也)、8の5・「君子は嚴牆の下に立たず」(論衡弁惑)、10の2・「過ちては改むること」(論語学而)、19の3・「至徳要道、以て天下を順す」(孝經開宗明義章)、23の2・「世に伯樂有り、然る後千里馬有り」(韓愈雜說馬説)など、有名なものばかりで、なかには、19の2・「君子ノ交ハ

17の1	17の3	15の2	13の2	13の3	17の3	5の2	5の1	7の7	2の2、12の1	2の1	1の1	23の1	5の5	4の3、12の1	2の4	2の2	15の2	1の2	13の2	13の3	17の3	5の2	5の1	7の7
------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	----------	-----	-----	------	-----	----------	-----	-----	------	-----	------	------	------	-----	-----	-----

淡クシテ水ノ如シ、小人ノ交ハ甘クシテ醴ノ如シ 礼記ニアリ」(『卮言抄』一一)、22の3・「大国ヲ治ルハ小鮮ヲ烹ルガ如シ老子経」(同前一二) など金言集に登載されたものも含んでいる。

さらに、同時代の他作品群との類似関係を見てみると、たとえば、2の1「親にそむきたる子」では、「たゞわか理をたてゝ、親の非をあくること第一の不孝ならん」という論点を展開しているが、これは『穀梁伝』を原拠とした訓戒であり、『童観鈔』一二七などにも原文とともに、説明が付されている。これを『仮枕』では、さらに、2の3において「我身をたかふり、君の非をかそへ」と主君への不忠の問題としても、敷衍させている。これに関し、『可笑記』一の二では、「穀梁伝といふ物の本に厚孝の子は、親の善事のみをいひふれて、悪事をばふかくかくすよしをしるせり。しからば、忠節なる侍は、主の善事のみをいひふれて、悪事をば沙汰すまじき也」という訓戒が示されており、『仮枕』の二段落をあわせたものと一致している。また、7の7「やつこのそむきはしりたる」には、陶淵明が使用人を我が子の方へ遣るに際し、自分の子同様、慈しんで使うよう申し送った故事が記載されているが、これも『可笑記』五の五八に登載されており、やはり同様に『童観鈔』一七二にも見えている(『可笑記』が『童観鈔』に拠る事、渡辺守邦氏に指摘有り『仮名草子の基底』)。

さらに本朝物でも、9の1「いにしへの聖の代」には、延喜の帝の慈悲の行為や、最(原文は当て字か)明寺時頼の廻国修業伝説が記載されるが、これは『可笑記評判』二の一(前者)や一の一六(後者)の了解部分に記載されている。これらは『卮言抄』四八ならびに九〇にも登載され、延喜の帝が御衣を脱いだ行為を、『卮言抄』では「自ら御衣ヲヌキタマハソヨリハ人々ノコ、ヘサルヤウニ政ヲセンニハ不如」として「徒善の類」と批判しているが、『仮枕』では、そのような嘲りに反論し、聖なる行為として賞揚している。『可笑記評判』も『仮枕』の態度に近い。時頼入道の廻国伝説は古来からあったものを書留めたものであろう。

その他、『可笑記評判』にまで広げると、二の七に「へ足ることを知る」ことや「金は山に捨てゝ」(『莊子』の件、三の九に「へ小人の交は飴の如し」の語、三の一四に「へ下つ方の者とも政道批判のおかしさ」、三の一六に「へ遊民」の件、六の九に「へいかづち、地震(当語句は可笑記文中にあり)」の件、六の一七に「へ顔回、原憲」の名、八の七に「へ生霊死霊」の件、九の二二に「へ友」の件、一〇の一に「へ忠功の者へのねたみ」の件、一〇の二九に「へ博奕打つ者」の件などがあげられる。

以上に関し、『仮枕』との直接の影響関係を認め得るものは何もなく、また検討も一部にすぎないが、ひとまず、本書がこのような近世前期啓蒙作品群と発想や内容の面で共通していることを述べておこう。

また、この物は尽しの作品としては、近世期に入り『童蒙先習』（慶長期）、『犬枕』（慶長期、写本もあり）、『尤之双紙』（寛永期）などが刊行され、それぞれ作品の特徴を有した。さて、『犬枕』の項目の中の一つに「16 すてかたきもの」があり、「古こよみ」が登載されている。しかし、これは『童蒙先習』、『尤之双紙』に見えず、『犬枕』（同写本）のみに「いらさうでいらぬ物」の中に「ふるごよみ」として記載されている。『犬枕』はこのほかに「おそろしき物」として「かみなり」「じしん」の兩者を記す（『童蒙先習』は雷のみへ不審なる物、『尤之双紙』は地震のみへこはき物）が、他書には見られない（『犬枕』20の1、2に連続して記載）。このことより『犬枕』は『犬枕』との関係が強いかと推察される。『童蒙先習』の戒戒の対象の中心は《公、朝》の視点であり、それに対して『犬枕』などは、『私、俗』とも言える。だが、一方で『犬枕』が「おもしろきもの」として登載したものは、月・雪・花の伝統的雅品に過ぎず、『犬枕』『尤之双紙』とは、また、異なる様相を示している。これはおそらく『犬枕』作者の個性によるものであつたらう。本稿では殆ど触れ得なかつたが、『犬枕』には他に五十首にわたる自作歌と、古歌を冒頭においた韻文的文章が見えており、こちら歌学のほうこそ、作者にとって、主要な文事の一面だつたのではないかと思われる。作者比定に関し、これら和歌は重要な接点と思われるが、今後の検討に委ねたい。

謝辞

本書の存在を御教示頂いたのは、佐賀大学田中道雄先生による。翻刻の件も以前にお勧め頂いたことがあつた。本書が、松平文庫調査開始当初から貴重な書物として注意を惹いていたことは、近時の先生の回想記「松平文庫の思い出」（島原新聞・平成五年三月二・三・四日）に見えているところでもある。

今回、ここに翻刻するに当り、先生に翻刻原稿を御一覽頂き、翻刻要領や翻字の誤りなど、細部にわたり御批正を仰いだ。もとより、本稿の責はすべて筆者に帰するが、御多忙中にもかかわらず、全巻にわたり多大な御教示を賜ったことをここに記し、深甚の謝意を表するものである。

また、九州工業大学石川八朗先生からは、本書と同様の写本随筆『世中に』が九州大学に所蔵され、既に「語文研究」第十九号に翻刻されていることなどをお教え頂いた。これらとの考察も今後の課題となるであらう。

最後に、本書の翻刻を御許可された、島原市教育委員会島原図書館松平文庫に対し、心より御礼申し上げます。

凡 例

- 一 底本は島原図書館所蔵島原松平文庫本 写本 二巻二冊である。
- 一 原本には丁付等がないため、前記遊紙を除いた墨付丁のみに、各巻最初より洋数字の通し番号で丁数を記し、表・裏をオ、ウで示した。
- 一 原本には章番号がないので、洋数大字で大項目に通し番号をつけ、洋数小字で各大項目内の小項目に番号を付した。
- 一 読解の便を考え、原文のおもむきをできるだけ損なわないよう配慮して、句読点を私に付した。
- 一 文字は漢字・ひらがな・捨てガナなど、すべてできるだけ原本に忠実に翻刻したが、以下のように処置した。
- 漢字は新字体を使用したが一、部残したものがある。

例 假、哥、霸、処

- 字形のくずれた文字や不明な文字は、正しい文字に改め、右側に△印を付した。
- 原本には見せ消ちによる文字の訂正があるが、当翻刻に際しては、正しく改めた方の文字を本文に組み、修正された元の文字は、そのすべてを該当文字の下にへゝで括って記した。なお、その他字形の崩れなどを正しく改めた見せ消ちは、ヒヒとし、正しい文字のみを記した。
- 誤字や通常使用されない当て字、また誤読・誤植と受けとられかねない文字は、右側に＊を付した。
- 脱字は正しい文字が、墨筆によって原文右側に記されているため、多くそれに従い、該当部分に補入の上、右側に○印を付した。
- 特殊な略体および合字は通常の字体に改めた。

《 翻 刻 》

假枕 序

春のなかめのさひしきころ、つく／＼と世のありさまをおもひつゝけ、身の上をかへり見るに、いにしへのおろかなるはすなをなり、いまのおろかなるはいつはるのみと、かきをへおゝきしひしりのこと葉の、いつとてもたかはす。その中にむまれて、まことになふよる（1オ）へもなく、身はすてふねのいつとなくたゆたふ浪にうきしつみて、すてに五十の春秋ををへおゝくり、むかへしらぬおきなかへはつかしく、手にとる鏡さへうとまし。せめて、さはよのため人のためてらすことこそなからめ、くもりかちなることろにて、此みちかの道うちとなく、かたはかりまなひかほ（1ウ）に、人の非をかそへて、みつからの非をしらす。なか／＼なききの浪によをつくす、海士のやつこもうらやましけれと、おもひしりたるかひもなく、ことろにうつりくる心のゆくゑ、筆にまかせてかきつくれば、ふくれしはらもやはらき、あなをほりたることろするも、いとあちきなし。されは、ひとつとしてめつらしきふ（2オ）しもなくいひもてゆけは、かの清少納言か枕草紙にことふりにたれば、此ふみを名付て、かり枕とやいふへき。そのこと葉、ひたふるにひなひたるにもあらず、また和哥のこのの葉もつたなく、のりの師のよをことはるからめひたるふみににもにす、たゝゑひすことろのすち、いとものくるおしきよ。しかは（2ウ）あれと、よの中に我

とひとしき人もあらは、心になふ折ふしは、しか／＼のつみゆるして見るへきや。かきをへおゝはつてのちは、鴨のはきのみしかきをもつかず、鶴のあしのなかきをもきるへからす。是非のさかひをうちわすれて、たゝ傀儡のまはへわゝせる人のいとなしたかひ、世のもてあつかひへい（3オ）草にそなふものならんかし。
(3ウ)

假枕目錄 上

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 嬉しからんもの | 2 勤習し芸いたりてゆるされたる |
| 1 時にあひたる | 4 逢見る恋 |
| 3 我子のほまれ | |
| 2 悲しからんもの | |
| 1 親にそむきたる子 | 2 家貧しき |
| きたる | 3 主君にそむ |
| 4 病ある人 | 5 わかれの恋 |
| | 6 秋の初 |
| 3 めつらしきもの | (4オ) |
| 1 鶯の初音 | 2 郭公の初声 |
| 2 年経て帰古郷 | |
| 4 しらまほしきもの | |
| 1 和哥の道 | 2 のちの世 |
| 3 我心のみなもと | |
| 5 くやしきもの | |
| 1 わかくさかななりし時の習勤さる | 2 わかき時あ |
| やまりありし | 3 逢て不逢恋 |
| 4 なしたる功むなし | |

き 5 いふましきこといひたる

(4ウ)

6 見たきもの

1 みすきちやうへてうの内 2 名所 3 めつら
しきふみ

7 にくきもの

1 理をしらす非を言人 2 佞人讒人 3 恩をしら
ぬ人 4 沙門の破戒 5 かうまんなる人 6 理
過てもないふ人 7 やつこのそむきはしりたる

8 あやうからんもの

(5オ)

1 からき政の国 2 あらそひ口論 3 風の前の灯
4 産する女 5 崩かゝる岸の下 6 しのひて法を
おかす人 7 軍のさきかけ

假枕目録 下

9 恋しきもの

1 いにしへの聖の代 2 若かりしむかし 3 おも
ふ人 4 みまかりし父母

10 はかなきもの

(5ウ)

1 およはぬことをねかふ心 2 かへらぬことをくゆる
心 3 つたなき男を頼女 4 水の淡 5 蜻蛉
6 朝顔 7 人の世の中 8 あしき子をも親ははこ
くむ

11 おもしろきもの

1 月の夜 2 雪のあした 3 花のさかり

12 心ほそきもの

1 無常の物語 2 すみかまのけふり 3 野辺のをへおくり 4 老のね覚 5 とをへお
く渡る舟のうち

13 きゝたきもの

1 法のことばり 2 あやしき物語 3 色このみの
物語 4 古郷のたより

14 さひしきもの

1 入逢の鐘 2 春のなかも 3 残る虫のね
4 猿の声 5 独ねの床 6 秋の夕暮

15 無益なるもの

1 博へ薄へ突 2 老て世のまはしり 3 あふやけ
の政の善悪を論する人

16 すてかたきもの

1 一芸一能ある人 2 古こよみ 3 つれなき人
4 契りし人のさかり過たる 5 冬かれの野

17 むつかしきもの

1 手習学門 2 たひく物もらふ人

18 いさきよからんもの

1 欲なき人の心 2 道にあたつて命をおへしまぬ

人 3 石川のなかれ 4 庭に水そゝきたる

5 あつき日の夕たち

19 たのもしきもの

1 ふた心なき臣 2 まことある友 3 我子の行末

4 病ある人よき医師に逢 5 よき夢見たるあした

(7ウ)

20 すさまじき物

1 かみなり 2 地震 3 天狗のあるゝ 4 生

霊死霊

21 おくゆかしきもの

1 木立ものふりたる家居 2 琴のつまをと 3 智

徳ある人のをへおゝろかに見ゆる

22 あさましきもの

1 おちふれたるさすらひ人 2 配へ魔へ処におもむく

(8オ)

人 3 からき政の国にすむ民

23 えへゑたきもの

1 財宝 2 智徳ある臣

24 久しきもの

1 仙人のよはひ 2 霧 3 亀 4 おさまれる

(8ウ)

假枕 上

1 嬉しからんもの

1 時にあひたる

世にましはる人、たれか名利をはなるべきなれ共、名をもとめ利をこのむは、をへおゝろかなるまよひなりと、名たゝるひしりも、これをいましめたまふ。名をもとむれば名をけかし、利をむざほれば利をうし(9オ)なふ。すへて、ねかひもとむることゝろより、よろづのさはりはおこれり。また、名利をはなれたるこそいさきよけれ、なといひて、つねにことなる人あり。これ名をすてたると見えて名をもとめ、利をはなれたるといひて利をこのむならん。道をふかく信する人も、利をすつることありとも、名をはなれたる人はあらし。い(9ウ)にしへのかしこき人も、名とけてこそ、いまの世までその名もつたはりけれ。もとめねかふ名にあらず。とくたけ誠にかなふ人は、をのつから名もあらはれ、さいはひもあるへし。たゝさしあたる一念のまよひをしり、身をおさめて時にしたかはゝ、もとむることなく、すつへきことはりもあらんやは。すなをにしていることをし(10オ)へし。たることをしはつねにたると、老子のをしへさもあらんかし。

2 勤習し芸いたりてゆるされたる

世の中によからぬ人は、かならず、我はむつかしなといひて、わかくさかんなりし時、一芸一能をもつかず、なすことなくてとしおいへひぬ。智もまた同じかるへし。よろつなれぬことわざにも、おほつかなきことのみおほへ^(10ウ)かるを、おや、はらから、ともとちにても、まめやかにいさめをなすに、けにもとおもはぬことには、とかくあらそひてきゝいれす。ことはりきはまれる道には、いなどいみなみかたければ、本上あしくてをへおゝよひかたしなといひて、あらたむるにをへおゝよはす。あしき道にはいりやすく、したひにくらくなりて、つたなきおきとなり^(11オ)てくちはてぬ。いくたひも我身をかへりみて、非なることをくひあらたむるにはゝかることなかれ。人は一たひせは、われはもゝたひなさんと、はけみつとめたる芸能、いたらすといふことあるへからず。

3 我か子のほまれ

子をやしなひはこくむには、あしき道にひかれす、よこしまなる^(12ウ)友にましはることのなきやうに、ふかくいましめ、そのほかは、をのつからなる本上にまかすへし。人の子としては、身をたて、先祖の名をあらはすこそ、あらまほしかるへけれ。

4 逢見る恋

こひくしうき年月のかきなり、つゐにおもひのすゑとけて、あひみる夜半のむつこと、何事をへおゝかは^(12オ)かたりつくさん。わりなき契りのなからひにて、皆老同穴をなすへきなり。それ恋といへることは、神代のはしめ、二へこゝはしらの御神、あまのうきはしの下にて、めかみおかみとなりたまひしより、いきとしいけるもの、いつれかおもせをかたらはぬ。されは文王后妃^{*}のとくをあけて、詩経のはしめにもこれをのす。男は外をおさめ、女は内を^(12ウ)おさめて、子孫つたへんためなるへし。心ざしうるはしく、かたちもすくれたらん人を、みもしみえもせは、花にたくへ、月につけ、まめやかに恋しのはんに、おかしきふしおほかりなん。ほゑとけしのちは、女は男によくしたかひ、上ならばまつりことをすゝめ、下ならばその家のことわざをいとなみ、ものねたみのこゝろなく、こゝろはせ^(13オ)をふかくみえて、うとからすしけからず、ふう婦の別ををへおゝこなはゝ、とこしなへなる契り、まことにあかぬならひなるへし。よくたり、みちすたれて、みたりかはしくなりもてゆき、ひとへに色にのみおほれて、家をうしなひ、国をかたふけ、よのそしりをうる人おほし。しのはるへき身にもあらず、しのふへきいろもうすからん^(13ウ)には、いかていろをこのまんなや。ことさらよはひもたけすきまとはぬほとの人、ひたすら色このみは、あるまじき道なるへし。

2 悲しからんもの

1 親にそむきたる子

もとより、おなし身をわけたる親と子なれば、したしかれといふもをへおゝろかなり。たとひへへあしき親にて、ひ(14オ)かことありとも、これ我身のあしきにあらすや。孝のみちしなぐなれとも、たゞ、わか理をたてゝ親の非をあくること、第一の不孝ならん。むかしもろこしの太へたい舜は、かたましき父につかへ、うきめにあひたまひしに、つゆうらむることろなく、をへおゝやにうけらへさゝれさるとのなけきしたまひしありさましるせる(14ウ)ふみ共おほし。この心さしにかなふへし。それはをへおゝよはぬひしり心なりなど、おもふへからす。みなこれすゑの世の、をろかなる人のかゝみそや。たゞそむくことなかれといひし文もこそあれ。しかれども、親のためみちにそむくわさにて、人のそしりあらんことを、ひとへにそむくことなかれといへるにはあるへからす。こゝろまことに(15オ)かなひなは、時にしたかひ、孝のみちをへおゝのつからをへおゝこなはれん。いかんそ、かねてきためんや。わか身をたて、したりかほにて、親の心にそむくもあり。おほくは、その身ひかことををへおゝこなひ、父のいさめにしたかはす、そむく人おほし。たゞ色をうすくし、利よくをかるくせば、親にそむくこととはよもあらしかし。

2 家貧しき

(15ウ)

人のうれへへひへは、まつしきよりかなしきはなし。まかれる人の天命にそむき、かくあらんは、みつからなせるとかなれば、いかゝせん。すくなる人の、まつしくてくるしめるは、いかなることそや。さきのよのむくひなりと、仏はときをへおゝかれたり。または、せんそのあく、いまあまりのわきはへわゝひなりといふ人もあり。顔淵か陋巷、けんけんか(16オ)扉、これならん。されども、かしこきは、みつからたかき位をとり、山林に身をくるしめ、なかきのちの世のくるしみをのかる。とてもかくてもよの中は、さためなきよのあすか川、なかれてはやき月日なれば、さかふるとてもいくほとそや。なかゝいまのまつしきは、のちのたのみなれと、ふかくおもひいりなは、よしやうきをもな(16ウ)くさむへきに、妻や子のうへにのそみ、かなしみなけくありさまをみは、かなしめるもことわりなり。たゞ心をすなをにして、つねの心をうしなはず、神や仏をたうとみなは、天のめくみあるへし。富貴は天にありとこそ、論語にも侍れ。

3 主君にそむきたる

君につかへ、ろくをうけて妻をや(17オ)しなひ、子をはこくむのみか、わか身のけふのいけるは、君の恩ならすといふことなし。つねに我身をうちすてゝ、ひとへに忠を心にかけ、君のこゝ

ろにそむかしと、つとめつかふる人ならば、いかてかそむかんや。ひとたひはさしもおもふ人の、なれてあなどるころとなり、我身をたかふり、君の非をかそへ、又久しくつかへて、かさねて恩もな(17ウ)ければ、うらむるころいてきて、そのろにをへおこたり、まめやかならず。その色はみえへへすとも、かならず君のころにつうして、うとくしくなりぬ。みなわか身をおもふとて、我身をそこなふ。身をすて君をおもはく、わか身もよくたつへきなり。身にたいしては、主君は天なり、神なり。そむくことあらんは、みなころのとかなり。此ことはへわりをしる人はおほし、(18オ)をへおこなふ人はまれなるへし。もしは、あやまりてそむくことあらんは、かなしといふもをへおろかなり。天にせくまり、地にぬきあしすこそ。

4 病ある人

すへて人は、病といふことなきものなり。まよひのころ、むすほれて病となる。心と身とふたつなし。あるひは、いかりの火にやかれ、うれへいの水におほれ、ある(18ウ)ひは、をへおよはぬ事をねかひ、かへらぬことをくい、いろにふけり、食にあき、はかりなきまよひつもりて、しなくのやまひとなる。薬をもちゆることは、ひしりの慈悲へ非にて、やむ事をえさるにあり。そのもとをわきまへ、心のまことにたちかへらは、病といふことあるへからず。病はいきとしけるもの、

なくてかなはぬものなり。いにしへのかしこき人に、や(19オ)める人おほし。天ちくのゆいま、もろこしのはくきう、そのほかにもかすあり。いふかしなんとといふ人あり。ゆいまの病は、をのつから世上の人のやまひをやむ。伯牛か病は、此人やしかも此やまひあり、命なるかなと、孔子のたまひし。天命はわたくしなし。あ、この人をもてしるへき也。

5 わかれの恋

(19ウ)

わりなくて、あひみし夜半はあけやすく、鳥の声、鐘のをへおとをうらむるにたらず。こよわかれては、またへふあふ夜半を契る。空もかたふける月を、たもとにやとしつゝ、むせかへる涙の雨、あはれをつくす。きぬひきはなちゆくほと、かなしからすといふことなし。

6 秋の初風

(20オ)

秋きぬといふよりのくかなしくて、露ふきむすふ風のをへおと、萩の上葉にをへおとつれて、心をくたく夕のかね、松のあらしをへおとかへて、身にしむいろやまざるらん。なへてよの中の、物をおもはぬ人にたに心をつくる、とよみたりしふることまでも、さにこそはあめれ。

3 めつらしきもの

(20ウ)

1 鶯の初音

春といへど、またさえわたるあけほのに、雪をおひたる軒はの梅、うちかはりくる折から、谷の戸出しうくひすの、いつしかたか木にうつりつゝ、春そとつくるはつ声は、けに雪きえぬ山里の人も、時をやしりぬらん。

2 時鳥のはつ声

夏衣きてしもこふる春の色を(21オ)今そへたつる山ほとゝきす

すへて四つの時、うつりかはれる空のけしき、花ほとゝきす、月雪の折にふれたるもみちの色、こゝろあらん人は、とこしなへなるたのしみならんとうらやまし。されは、永縁僧正の、いづもはつ音とよみたりし山時鳥、百千かへりきくとも、さらにあくましくこそは侍れ。(21ウ)

3 年経てかへるふる郷

すみなれしふるさとを出て、とをき国にいたり、とし月を経、又いつくにもあれ、旅たつことあるに、めなれぬところへ見めぐり、うちつけなる人にもなれむつひ、なにはにつけてめつらかなることおほかるを、ほとふるまゝに、ふるさとの空をなかめては、いつしかかよふうら風に、たひねの夢もむ(22オ)す

はれぬ、草の枕もすさまじく、うきねになくやさよちとり、す

まのわかれのいにしへも、おもひしらるゝことのみにて、すゝろに袖そぬれまざる。うきにもあらぬ旅にたに、恋しきものは

ふるさとを、ましてはいしよにおもむき、または、うき世をさすらひて、身ををへおくしなのなき人の、行ゑもしらすさま

よふは、いかばかりのおもひならん(22ウ)と、よ所のあはれもしらるらん。さて、ふるさとかへりてみれば、そこはかとな

くあはれてゝ、うへをきし庭の松かけしけりつゝ、花はかはへわゝらぬいろながら、それともあらて匂らん。おさなきちこ

はおいへひたちて、見わすれたるもおかしく、このことかのことかたりつゝけ、いとめつらしくおもふまに、こゝも月日の

かさなりて、よをあき風のをへおとつるゝ。(23オ)身のありさまのうきまゝに、いてゝいなんとおもふこそ、こゝろかろし

とおもほゆれ。とてもかくてもよの中は、いづくもかりねの夢なるを、うつゝと見るそはかなき。

4 しらまほしきもの

1 和哥の道

それ大和哥は、二はしらの御神、天のうきはしの下にて、みとのまくはひ(23ウ)したまひし時、あなにへやとのことの葉より、人の心をたねとして、言のはにいつるは、みな哥にあらすといふことなし。すさのをのみことのやくもたつの哥を、三十一文

字のもとゝして、神の道の光^{あきら}けく、たいやうひとつのことはへわ^へりいちしるし。わか国にむまれとうまるゝ人、もてあそはすといふことなし。花になくうくひす、水に²⁴すむかはへわ^へつまで、いつれか哥をよまざると、つらゆきもかきをへお^へきけるそかし。わきて上にいます人、よまてはいかゝあるへき。またしらぬみやまのおく、をへお^へとろかすゑまで、くもりなき月に心のとくをみかき、かりほのいほの露しけき、いやしきたみのわざまでも、おほししろしめしたりけん。たきゝをになふ山人の、花のかけにや²⁴すらふに、ことわざしけきよをさとり、のとなる春のあしたは、たみをめくまんころをそへ、秋のかなしき夕暮には、たゝしき道のまつりことをおもひ、なにはもれぬよしあし、おさまる国のたつき、なに事かこれにしかんや。人ゝに哥よませて、さかし、をへお^へろかなるをわきたまへ、とくある人をえらはしめは、国いよくをへお^へたやかにして、天道にか²⁵なふ道ならん。されは、天地をうこかし、鬼神も感せしめ、男女の中をもやはらくとこそ、古今の序にも侍れ。

2 のちの世

仏のときをへお^へかれし法は、みなこれ後のよをしりて、このよのにこりをきよめ、ねかひつとめよとなり。をしへにしたかひて、あるひは、法花經をとうとみ、とくしゆすれば、妙なる法のちからによつ²⁵て、くせいへひ^への舟にさほさし、く

かいへひ^へのうみをわたり、かのきしにいたるといひ、あるひは一すちへし^へに念仏すれば、りんしうの夕へに、弥陀如来すくひとりたまひ、西方の浄土へむまれて、たのしみをきはへわ^へむといひ、又は、仏一枝の花をさゝけしを、かせう無法の法をさとり、達磨これをつたへて、我心にて心をさとり、見性成佛といふ。そのほか、秘密の宗あじ²⁶本不生の道にかなひ、此身をかへすといふ。ことひろければもらしつ。いつれのみちももとはひとつにして、すゑはしなく^へにわかれり。そのことわりはわきまへすとも、その宗を信じ、をしへの法にまかせて、一すちにねかふ。のちのよはしらても、うかふたよりならん。仏のをしへひとつとして、たかふへからず。かならずこれはほうへんなりなと²⁶おもふことなかれ。中くしりかほにて、かれを是へせ^へし、これを非し、我さとれりとおもふ人は、心きたなきなまうかひ、かへつてまよひふかゝるへし。たゝのちの世は、雲となり、霞とたちて、一かうなきものなりとおもふ人、かへすくあさまし。なきときしは、このよのこゝろなり。そのいろかたちなき所こそ、あきらけき心のまことはあるものよ。²⁷およそ仏法は、のちのよをすゝめて、このよの五常をとゝのへ、もろこしの儒道は、このよの五常をへお^へしへてのちのよのまよひをさとす。いふはいはへわ^へぬことはへわ^へりをしめし、いはぬはいふ道にかなはず。道はのりによるへからず。たゝその人の心とく、人のよしあしきく人の耳なるへし。

3 我心のみなもと

(27ウ)

うき世の中のことわき、人のうへのよしあしなど、われかしこけにいひあひ、智ありかほにふるまへとも、わか心のもとをは、つゆしらす、しらまほしとおもはず、さけにゑひたることし。ものくるひとやいはん。ほとなくまつこにのそんで、なにこともゑきなく、ほうくとしてはてぬ。のちのよはなきものなり、あるものなりなんと、ひころは(28オ)いひもし、おもひもし、つゐ(ハ)にゆくみちとは、かねてしりぬれと、きのふとけふにせまりぬれば、としころとかくおもひしは、よそのたからをかそへたりと、はしめておとろくなり。我心にて我ころをしらす。いまたゆたかにてなからふるうちに、ちある人にちかづきて、いそぎ心をさとりへし。もし心のもとにかなひなは、いきしには、よるひるの(28ウ)ねふ(ハ)むりの床のをきふし、さめなん夢の枕そや。を(ハ)およはぬところとおもふへからず。しるへはわかこゝろなり。まなこにてまなこをみ、耳にてみ、をきくならん。心に心をつけて、かたときもわすれずは、つゐにまことになふへしと、智(ハ)知ある人の、のたまひしそかし。

5 くやしきもの

1 わかくさかんなりし時、物ならひつとめさる

(29オ)

としわかき人、あたに月日を(ハ)おくることなかれ、けいにあそふへしと、ひしりもおしゆ。わかき時は、いろにふけるおもひふかし。此心にひかれて、何こともすきみ、むなしく光陰ををくり、おもひよる道もあれと、ならひつとむることなく、おい(ハ)てのち、くい(ハ)の八千たひかいなきは、むかしも今もまのあたりなり。春たかやし、くさきらされは、秋はかな(29ウ)らすたのみなき、たい(ハ)しかはらのふせい(ハ)ひ、おもひしるへし。

2 わかき時あやまりありし

わかき時は、たれ人も、あたる心まよひのみにて、なにはにつけ、よしをもあしとおもひ、あしをもよしとおもふこと、いくたひもあるものなり。おい(ハ)ておもへは、あやまりしをね覚のとこにおもひ出て、くやしきことおほかるへし。(30オ)本上あしき人は、としおい(ハ)くちてたにを(ハ)ろかなるおほし。よろつのことになれむつれてとしをわたり、いかてかくはなど、なにをしていたつらに老ぬらんと、高砂の松をたに、はちけん人も有けらし。ひたすらわか心を師とせすして、智ある人にしたかひ、あたことをも、まめことをも(ハ)こなふ

は、かへつてちある人なめり。

(30ウ)

3 逢不逢恋

あひ見てのちのこゝろくらへに、昔は物をとよみしを、まひてこゝろつくしに恋く／＼て、いつしかあふ夜をまつらかた、うきこかるゝあまを舟、よるへのなみのうつせかい、うつゝかなしきありあけの、月もくもれるわか涙、せんかたもなき袖のうへ、をきあまる露のかことをも、かけてしのはんうき人の、行ゑよいかに(31オ)なりぬらん。あひみしことも契りしも、わすれすなからうつゝならねは、まことに夢とのみうちすして、いにし人の心までをしはかられぬ。

4 なしたる功むなしき

人にすぐれたるわさをなしたりとも、その功にほこりて、いきほへおひまうにいひそし侍へらは、その功むなしうして、人ほむる事あるへからず。かへつてそし(31ウ)りあさけるへし。たとへは君のため、忠をぬぎんて、みやつかへへひに身をくたき、としを経、あるひは、いみしきはかりことをめくらしして、てきをほろほし、又は、いのちをすてゝ義により、そのほか功なり名とくへきを、君くらくしてこれを賞せず、恩をあたふることみなからんを、くやしともおもはず、もとよりなすへきわさなり、いかめしきこと(32オ)にあらずと、かりそめにも、むくひをのそむことなくは、その功天道につうして、仏神おへわ

うこあるへし。なしても功とせずといへるは、まことの人のこと葉也。もとより、恩をのそみて忠孝をはけますは、身のための欲にして、まことの道にかなふへからず。

5 いふましきこといひたる

いにしへの人、かろ／＼しくこと葉の(32ウ)いてさるは、身のをへおよはさるをはつればなり。みたりにもいはいはされといへるも、さる事なり。なにこともしたりかほに、くちとくものいふは、よからぬ人なり。かならずあやまちおほからん。をへおろかなる人のいきは、のんとにあり、はけるかことし、まことの人のいきは、きひすにあり、といひをへおきけるこそ、ありかたけれ。又あまりにくちおもくして、おもひばかりすぎ(33オ)たるは、まとひてことをうしなふならん。心をまことの道にいれ、ものにうははれず、つねにかへりて、やむことをえすしてもいはいは、あやまりすくなかるへし。

6 見たきもの

1 みすきてうの内

そらたきものゝにほひうちかほり、いたくしのひたるこゑ、かすかにいろめひたるきぬのつま、かひま見たるけは(33ウ)ひ、みすもあらず見せぬ人の恋しきにて、かひへいのとらのひきつなもやあらでなと、そゝろなるこそ、わかき人のあたなる

こゝろまよひなんめれと、いとにくからすしもあらずかし。

2 名所

そもく日のもとに、国々所々名所おほき中に、名たかき富士の根こそ、又よの山にたくふへきかたやはある。もとよ(34ウ)りかはらぬすかたなから、折ふしのうつりかはるにまかせて、たえせぬ雪のむらぎえ、おもしろしともあわれともいはんかたなし。見るかうちにうつりゆく雲のたゝすまひ、めかれせず。なかめをへおりてあまくたりし仙人の、ちとせをふるともあくましや。ふもとの里にいきいたりて、あふき見たるは、わきてことなるけしきにたへす。

よも山はふもとのちりとなりにけりふしのたかねのちかきなかめに
(34ウ)

さて又名にしあふ所々、おもひ出るにまかせて、

吉野山

いつはあれと春はこゝろのうかれゆくよしのゝ花に身をやたくへん

龍田山

秋はたれもみちのにしき龍田山(35オ) たつきもしらてわけまよふらん

浅間山

おもひあれはくゆるけふりをあさま山なかむるたひに身にたくふなり

筑波山

のかれえぬおなしこゝろにつくは山はやましけ山しけきおもひは

逢坂山

のとかなり君のめくみにあふさかの(35ウ) 山もあつまの春をむかへて

須磨浦

わひつゝもいつまでよにはすまのあまのうき身こかれてもしほやかまし

明石浦

むかしおもふいまもあかしのうら波におもかけのこるおきつしまふね

難波浦

よしあしもしらぬ身ながら難波かた(36オ) なにおへをふみつのはまをしそおもふ

田子浦

うき身よをなけかぬ時そなかりける田子のうらなみたゝぬ日あれと

小余綾磯

五十にあまりしとしとをるとて

立かへるなみにもあらて老そゆく身はこよろきのいそちあまりに

武蔵野

秋の比ゆきいたりて

むさし野や草のゆかりのはてもなし(36ウ) 露の玉しく末の秋
かせ

嵯峨野

分まよひ色にしそめは女郎花うき世のさかの名にやたつらん

角田川

角田川むかしをとへはみやこ鳥こたへぬ浪にあはれしれとや

佐野々舟橋

あはれなりさのふなはし我もよを(37オ) わたりかねたる身
にたくふれは

ちかのしほかま

みちのくのみちにこゝろはちかゝらてちかのしほかま身をこ
かすらん

三保崎

うかれゆく心をなみにまかせてもめかれぬかたやみほの松は
ら

白川関

きのふまで都の花よいつのまに(37ウ) 身はしら川の関の秋か
せ

霞 関

長関なるあつまの春の時なれやかすみの関も空にひらけて

清見関

立かへる身はいかにせんきよみかた関もるなみにこゝろとゝ

めて

不波*関

不破〈波〉の関秋風さそふたひの袖(38オ)のきもる月にこゝ
ろとめても

佐夜中山

またこえへへしむかしの人もいまの身も同じ夢路のさよの
中やま

宇津山

秋の比こゆるとて

つたもみちそむる心は夢ならてうつゝの秋のうつやまこえ
へへ

いつも名をうる所は、山のたゝすまひ、水のなかれ、ふりに
し里、み草ゐる(38ウ)池のおもて、世はなれたるみ山の松の嵐、
あるひは海きはへわの岩にくたくる浪のをへおと、ことか
たにはかはへわりて、あはへわれにもおかしくもおほゆる
に、折ふしとひかふ鳥も、めなれぬこゝちしてさまよへは、し
らぬおきな出て、ひなひたるこゑにて、いにしへのことなど、
あやなくかたりきこゆるもいとおかし。そのほか名所かすく
なれはもらしぬ。(39オ)

3 めつらしきふみ

よにめなれぬふみには、又おかしきふしもあるものなり。たゝ
し、世につたはりて、たれもしれらんふみにこそ、たへへえ

なる法の道はおほへへかめれ。道をそなへしうつはへわもの、よにつたはるこそめてたけれ。されとも、すゑのよには、ひしりのをしへたかはす、まなふ人まれなり。中ころ、もろこし、日のもとにて、智のたら(39ウ)さるをもしらす、をのかし心をはきかけ、わたくしのことはりをつけ、さもありけにかきそへしを、まことのすちとこゝろえへへ、かしこき人のありてなど、ことくしうたうとみよみあへるおほし。かゝるゆへに、すゑのよには、道のちまたわかれて、たゝあらそひのたねとなる。ひとへに、目なき人の色をろんし、みゝしひたるものの音をあらそふにことならず。中くふみのな(40オ)きには、はるかへおとれり。人の心かたくなになり行こそいたましけれ。しかはあれと、なんちはひつしへちをおへへしむ、われは礼をおへしむとの、くしのこと葉そありかたきと、ある人のたまひし、さもあるへきにや。

7 にくきもの

1 理をしらす非を言人

世に智ある人はすくなく、をへおろかなるは(40ウ)おほし。ことばりをわきまへす、非なることを是と思、是なることを非といひあらそふなり。しかれとも、それをいかりにくみあさけるは、ともにをへおろかならん。その折ふしは、しはらく機をとをして、こと葉をとめ、ことなるかたに心をうつして、

ことさめたらん時、しつかにかくありなはいかになど、うらやかにいひきかするに、おほかたは、ことばりにふくするもの也。猶、ひかめる(41オ)人はいかゝはせんなその、人によりしなにより、ほうへんのいかりもあるへし。こゝろをそむることなれ。わかたに非なく、心をものにうははれず、すなほにして、神のいきをなむへきにや。

2 佞人讒人

こゝろによこしまをふくみ、よき人かほにもてなし、人のさかふるをうとみ、ほろふるをよろこひ、いくさもおこらす(41ウ)敵もなき折ふし、あらぬばかりことをめくらし、人の中をいひさまたけ、いつはりのみいひそし侍る人をは、此手かしはのふたおもてにて、ねしけ人といふへし。かゝる人の国をみたすこと、かきつたへしふみともおほし。中くぬす人よりは、はるかにをへおとるへきにこそ。

3 恩をしらすぬ人

よき人は、人に恩をほとこすといへとも、(42オ)むくひをおもはず、そのことをたのます。たとへ恩をうけたる人、恩をわすれてそむくことありとも、我はかくありしなといひて、いきとをることなし。されとも、その人の非なることをしらすにはあるへからず。かさねて恩をほとこさず、なをさりなるのみならん。もし、あやまちをくめて、あらたむるこゝろまことな

らんは、ふかくつみをにくむへき(42ウ)や。かゝらん人は、なをはつかしきことにあらすや。その恩をむくふまでこそなからめ、かへつてあたをむすひ、そむける人をは、人とやはいふへき。野山にすむ鳥けたものゝ子をやしなひそたてしに、久しく人をしとふ。つねに人をおそるゝものたに、をへおのつからかくこそ有けれ。人としてはよく恩をしるを、人といふへき。又人に恩をほとこしても、そのしなをいひ(43オ)めくり、恩をわすれし人をそしり、いきまは、ともにおなしこゝろの人ならん。

4 沙門の破戒

それ沙門は、生死をはなれて、不生ふめつのこんげんに立かへり、さいけの人をみちひかんためなれば、法衣を身にまとひ、仏のいましめにそむかす、一大事の因縁をさとしうへきなり。第一ふほんにして、さい色をはなれ、にくをくら(43ウ)はさるをもつてたつとすとす。しかるに、はかいむさんにして、人のせもつをうけ、にんにくしへちひの衣をきながら、かまんの心をおこさは、まことに遊民にして、国のついでなるへし。

5 かうまんなる人

道をしれる人は、我か非をよくしりて、道のきはへわまりなく、つくさるほどをわきまふれば、みつからえへ急たりとおもはず、くら(44オ)きことをのみなけくは、なんそ人にまさ

れりとおもはんや。よくもわきまへしらぬ人の、はかなきあたことを、えへ急たりかほにふるまふは、くらきよりくらきにまよふ心はなはたし。けうまん山のいたゝきには、法水とまらすとこそ、ほとけもときたまひけれ。

6 理過てもないふ人

しることはやすく、をへおこなふことはかたしとか(44ウ)や。よき人はくちおもくして、ものいはへわぬにたり。やむことをえず、せまりてのちものいふ。ひめもすいふといへとも、一言もいはす、終日もくするといへとも、市よりもかまひすし。いふにもあらず、いはぬにもあらず、ありやなしやの里にあそふことは、をへおよひかたき所なれば、しるてこととはるにをへおよはす。ことをつゝしみ、しつかにものいふへし。くちにまかせてさえ(45オ)つるは、下さまの人におほし。ことはりをわすれてこそ、ことはりはたつへけれ。

7 やつこのそむきはしりたる

をへおろかなれば人をしてなく、あしきをよしとおもひ、また、あしとはしりながら、わつかのどくいにひかれて、しのひてするほとに、ひかこしいたし、ものぬすみとり、はしりにくる也。おほかたは、その主へぬしの心ひかくしく、慈悲(45ウ)もなくして、ちりあくたのこくにおもひなし、なさけなきふるまひかきなり、しへたくるほとに、身ををへお

くところなきまゝに、そむきはしることおほし。むかし、たうのゑんめいか、一人のやつこをわか子のかたへつかはすとて、われなんちをあはれみ思ふゆへに、此人をつかはすなり、此人もまた人の子なりと、いひをくりしこそあはれなりしか。(46オ)

8 あやうからんもの

1 からき政の国

君はすなをなれとも、臣よこしまなれば、その国あやうく、臣はかしこけれとも、君よこしまなれば、かならずおさまらず。

かゝる国には、よき人あれともちあられす、よをのかれて山林に身をかくす。倭人讒人のみ朝に立て、まつりことにたつさはる。つみなきも(46ウ)のもけいにあひ、つみあるものはへつらひて、そのわさはひをのかる。風俗みたれて、しもくまでよこしまなるこゝろとなる。民のなけきつもれば、かならず天帝いかりて、寒暑時をたかへ、こくみのらすとかや。わさはひおほく、つゐにはみたれなんとす。むかし人丸に、一首の哥にてあめか下しろしめさん心をよみてまいらせよと、おほせ下(47オ)されければ、

神南のみむろのきしやくつるらたつ田の川の水のにこれる此国は神国なり。南は陽神のさかんなるかたなるゆへに、神南山にたくへ、みくさのかんたからそなはりて、おさまるへきを、此きしくつれたれば、立田の川の水にこれり。もとよりみつ穂

の国ともいへは、たかやす民によそへて、立(47ウ)田の川とやつらねけん、なへての人民なるへし。そのもとみたれて、末おさまるといふことなし。其もとは君の御心なり。みなかみきよきなかれには、そのしたたりをうるもの、うるほはすといふことなし。又、山辺赤人、

和哥のうらにしほみちくれはかたをなみあしへをさして田鶴鳴わたる

日の本は、大和といふ大きにやはらく国な(48オ)るゆへに、和哥の浦といへるにや。みつればかくることほり、をへおこりたかきにたとへ、みちくるしほをひきかけ、あざりする所なきを、かたをなみとよせたり。あしへはもとより、よしあしのあしきこゝろのゆくゑとや。たつはたかやす民のなけき、なきてやよをはわたるらん。そのち又、紀貫之、

桜ちる木の下風はさむからて(48ウ)空にしられぬ雪そふりける

のとかなる春のそらを、めくみある君にたくへ、たみをへおたやかなりといへとも、よこしまなる臣ありて、下のなけき上につうせす、空にしられぬ雪とかや。いつはれる春の雪を、へつらへる人にたとふ。くまなき空の月かけも、おほふはつらきうき雲なり。ありかたき哥なるへし。(49オ)

2 あらそひ口論

ひすかしき女も、おさなきちことはあらそはす、おなし女とち

とはあらそふ。とものをへおゝろかさなれはなるへし。男も女とはあらそはす、おなし男とはいとむ。おなしたくひなれはなり。智ある人も、をへおゝろかなる人とはあらそはす。世のましらひをみるに、かりそめのたはふれにも、はしめはかるくいひそし、のちにはこと葉たかひ、(49ウ)あたをくたくこゝろとなり、身をほろほすたくひおほし。よき人は、たゞ弓ある時のみあらそふとこそ侍れ。

3 風の前の灯

あふらつきて消なんは、かきりある道也。風にあたりてまたゝくは、はからぬあやまりなるへし。されは、人はよく身をおさめて、きはまる時をまたんこそ、あらまほしかるへけれ。よこしまををへおゝこなひ、あ(50オ)やまちて身をうしなふは、のちのよまでもまよふへきもといなりけらし。

4 産する女

神仏といへども、女のはらにやとらぬはなかるへし。智ある人のよに出るもしかなり。されは、女はあしき心をいましめ、あひきやうありてうるはしく、うらみねたむこゝろをすて、つとめて人我の相をはなれなは、よにすぐれたる人(50ウ)そのはらにやとるへし。しからは、その母もつゝかなく、なかきよまでもうかふたよりとなりなん。よくく心をつつしむへし。さらすは、地こくのつかひして、仏のたねをたつとかれし御経に

ひとしからんのみ。

5 崩かゝる岸の下

此身は父母にうけたり。そこなひやふることなかれと、いにしへよりのをし(51オ)へなり。されは、君子は巖墻のもとにたゝすとなり。しかれとも、義にあたり、道にかなひてゆかんに、いかなるあやうきところにもたつへし。あたに此身をうしなはんは、いたりてをへおゝろかならんと也。

6 しひて法ををへおゝかす人

人はたゝ智へ知をすつへき也。智へ知をすてされはあしきわさなりと、われもよくしりなから、よくのこゝろふかきに(51ウ)ひかれて、人はをへおゝろかなり、よもしらしなとおもへり。人の人を見ること、その肺肝のみるかことし。狐はわなをしりてかゝるものなり。これも、虎の威をかるよりしての智へ知よりかゝるとなん。つみををへおゝかす人、まれには世にあらはへわゝれすして、とをることもあるを、そのことゝはなげれと、ほとなく天のせめをうけ、おもはすの災にあひ、をへおゝかさぬ罪に(52オ)しつみ、身をほろほすことあり。つみありても、まぬかるゝことあれば、また、つみなくて、わさはひにあふ人も有と思へり。それは目に見す、耳にきかされは、しらぬにこそあめれ。おほかたあらはれすといふことなし。天道仏神は、一念のきさしよりあきらかにしろしめす。ゆめくうたか

ふへからず。こゑをあくれは山ひここたふ、(52ウ)このよにてほろふるのみならず、なかきよまてのくるしみとなる。おそれてもおそるへく、つゝしみてもつゝしむへきは、此いつはりなり。心のとはゝいかゝこたへん、とよみし人もこそあれ。

7 軍のさきかけ

あやうきを見て命をきはむるは、ものゝふのみちなり。たゝいまのかれて、なからへたりとも、そもいくほどのあひたそ(53)さや。むまれたりしその日より、百歳をふるとても、わづかに三万日なり。過にし程は昨日の夢、今ゆくすゑもさためなし。たれか百年のよはひをふる。たとひへへゝゝさたまりて、百歳をたもつとも、くわうゑんやのことし。しはらくもとゝまらず。とてもかくてもなき身なれば、君のため、親のため、義にあたりに、せつにのそんですてん命、身のさいはひに(53ウ)あらすや。いはんや、軍のさきかけをや。名はのちのよにとゝまり、その家にのこれること、よろこひのきはまりなり。なかく夢路をたたらんより、とくさめたらんこそ、こゝちもよかるへけれ。常に神明のともし火をかゝけよとこそ、ある文にも侍れ。(54オ)

(54ウ 余白)

假枕 下

9 恋しきもの

1 いにしへの聖の代

いこくをいはは堯舜の代、我朝にては延喜てんりやく、武家の代となりては、北条の八代なり。かしこくもおさめたる政を聞つたへしこそ、恋しけれ。その中に時頼は、富貴こゝろのまゝなる身の、万人のために身をす(1オ)てゝ、見るもわひしき修へ執へ行者となり、諸国をめぐりたまふこゝろさし、ひしりともいふへし。ある時は、あしたゆき山路にふみまよひ、ある時は、あやうきふかき川瀬にうきしつみ、あめにそほち雪にたゝすみ、いかばかりのうきおもひなりけんと、おもひやるさへかなしきに、旅ねの夢のうき枕、夜をかさね日を送りて、一鉢のもうけ、あかさのあつもの(1ウ)にたへしのはれしありさまをきくに、なみたもとゝまらて、恋しといふもあまりあり。しかるを、延喜のみかとの、寒夜に御衣をぬかれ、西明寺の諸国をめぐりたまふを、さあらんよりは、民のうへすさむからぬやうに、よをおさめんにはしかし、小けいなりとあさけりし人の心のうたてきよ。誠にかなふ御こゝろは、たくみはなきものを、をへおのつからなるめく(2オ)み、やむことえさるこゝろさしを、よくにまよふ心の程にては、つうせさるこそことはりなれ。

2 若かりしむかし

なかれてはやき飛鳥川、淵瀬もいつかすきの戸を、あかしくらして春されは、よを秋風のすさまじく、たつことはやきとしなみの、かへらぬむかしをしのひつゝ、かしらの雪とふりま(2)うさる。身ののちのよのやみちをは、しらてうきよのあた夢に、まよふまぐらのね覚には、むかし恋しきなみたかな。

3 おもふ人

つくくくと、なかめふる屋のしのふ草、しのひもはてすいまははや、人にこゝろをつくは山、は山しけ山まよふ身の、かけとなりてもさりとては、そはぬ人こそつれなけれ。まよひのたねをまく(3)すはら、世を秋風を身にしめて、さばくこゝろをわれなから、おもひかへせとさよ衣、夢にも人のみえへへはこそ、なみたの海にうきしつむ、恋のやつことなりはてゝ、あふをかきりの玉のを、たえへへてつらきをいかにせん。なけきの森の雫こそ、うき身の袖のたくひなれ。

4 みまかりし父母

(3ウ)

さらてたにこしかたは、しのはしきものは、父母かそいろにはなれ、三とせなゝ年をふるまゝに、猶恋しさはますかゝみ、うつるかけさへ親にて、わか身なからもなつかしく、くやしきこともおほかめり。此身はさても、父はゝの身をしわけたるこ

となれば、いきてはしたかひ、しゝてはわすれず、をへおへりをつゝしみ、とをきをしたへとふへしとは、くしの言葉ならすや。(4)もし又、久しくなからへて、親もろともにあるならは、まめやかにつかへて、おいへをひひかめることありとも、露あしくともおもふまし。とにかくにそむかしと、いまさらおもふもいとななし。けにや愁人のためにとゝまらすといへる月日に、あとのしるしを行てみれば、としくゝにふりのみまさりて、くち葉にましろうもれ水、昔に(4)したゝる露ともに、なみたのよすかとなりけり。さてもふたゝひ夢ならて、あふことかたき石にのこる、そのおもかけこそ恋しけれ。

10 はかなきもの

1 をへおよはぬことをねかふ心

もとより、ねかひといふものは、人の世のまといのはしめなり。功德は人にありと、ふるき文にも侍り。されはね(5)かひてかなふへきは人の道、のちのよかなふましきはさいはひなり。これねかひによるならは、よの中にまつしき人のあるへきかは。よく身をおへへさめて、こゝろすなをならは、をのつからとみのきたることもあるへからんか。

2 かへらぬことをくゆる心

人はたゝくゆることのなきやうに、まへをよくつゝしみ、こと

ををへおゝこなふへし。(5ウ)もしあやまちあらは、あらたむるにはゝからすとは、くしのこと葉なり。そのことふたゝひなきやうにあらまほし。まことに千度百度くゆるとも、かへらぬ水のなかれ、いかにしてせきかへさん。あやまつてもくへすとは、まことの人のこと葉なり。此ことはりをはしりながら、くゆるこゝろのまよひをおさむるみち、まなはさるこそをへおゝろかなれ。(6オ)

3 つたなき男をたのむ女

それ女は、親の家をいてゝより、ふたゝひかへらぬ身にしあれは、わか男を主君とおもひ、此よにてはむつましく、のちのよもむまれあひ、たえへゝぬ契りのなからひなり。つらくおもふに、わかくさかななりし時は、よろつへすゝたかひに見ゆるして、さて過ぬ、とし月ふるまゝに、子ともいてきて、やうやくさかりもす(6ウ)き、みにくきすかたとなりゆくを、ふかき契りのわりなくて、男をへおゝろそかにおもふとしはなけれとも、うつろひやすき花の色、なれにし袖もうす衣、夏野々草もしけりゆき、庭のよもきふ露ふかく、秋風たてはあちきなきおもひも色にあらはれて、ちくさにものやおもふらん。かゝりし時は、女もさすかに念しえず、こゝ(7オ)ろひかみて、とさまかうさまにうらみくねり、ものねたみふかきゆへ、もとよりつらき男にて、猶うとまるゝこそうたてけれ。うきもつらきもよの中は、夢まほろしとおもひすて、ねたましきこゝろさ

しをわかひかことよくしりて、なにのおもひはゝかりもなく、むかしにかはらぬこゝろはへ、露あさむくことなけれ。人のつら(7ウ)きをうらむなよ。我ことはりをわすれなは、いかなるゑひすなりとも、おもひしたはぬことあらし。我はかくあるものを、かたましき男にて、そのかひもなきなんと、こゝろにもおもはず、こと葉にもいたさず、見そめし契りをすてかたく、まめやかにおもひとまるへし。その家のさかへへえゝんこと、妻のこゝろによるものなり。たとへ男はあしく(8オ)とも、子のゆくすゑはめてたからん。我子にかへいとほんや。よしやうきをもしのひはてゝ、身をすてたるとおもひとり、かりにもいかることなけれ。めしつかふ女にも、たゝしへちゝひふかくあたりつゝ、わかよきにもほこらす、をへおゝたやかにあらんこそ、女とはいふへけれ。よにすぐれてかたましく、なさけもしらぬあらゑひすの、みちにもれたる(8ウ)ともからも、いろにふけり、あひにおほれて、めしつかふ女わらはへまで、妻をあなとり、あらそひにくみ、あるにあらぬうき身のほど、しのひかたきはことほりなれとも、かゝるおとこにむまれあふ女的身こそ哀なれ。たゝことはりをうちすてゝ、花にそみ、月をなかめて、ひたすらにわれをわするゝ心あらは、むくらのやともをのつから、かた(9オ)しく袖になくさまん。人は四十のころほひまでは、なからへてもありなん、そのほと過なは、よにありてなにかせん、四十にたられてしなんこそめやすかるへけれど、かぎしはけにさることそかし。かならずしも玉のをのた

えへへねといふにはあるへからず。かきりあるならひをはいかにせん。すてぬよなからよをすて、しなぬ身なからしなにと、(9ウ)こゝろのゆくゑなるへし。うきはさなから、なかきよのたのしみとなること、女のうへにかきるへからず。仏の法にも待るとかや。

4 水の淡

なかれてはむすひもあへぬ水の淡のはかなきものは人の世の中

5 蜻蛉

かけろふへうのありやなしやのゆへいふま暮(10オ)たゝそらのみのなこりなりけり

6 朝顔

一時のさかへもよしや露のまの身はあさかほのあさましきよに

7 人の世の中

けふありとたのむもはかな飛鳥川ふち瀬にかはる人のよの中あたしよとおもひしりてもしらぬ哉こゝろのやみのはれぬかきりは

(10ウ)

8 あしき子をも親ははこくむ

かそいろのやしなひたてしかひもなく、をへおゝろかなる子の人となりて、あらぬみちにそまり、身をあやうくして、おへをやになけきこらす本上、よからぬ子のならひなり。すぐせつたなくかなしみはこくむは、おへをゝやのこゝろならん。人の子としては、親のこゝろになりかはり、老たるおへをゝやのこゝろをやすく(11オ)せんとのみおもふへし。たとへをへおゝろかにして、ことほりをもわきまへす、かたましくて、おとしめいかることありとても、まことはにくしとおもふおへをゝやはなし。うつつえへへをはかなしまで、よはるつえにねをなきし人も有けんかし。やけのゝきゝす夜の露、子をおもふやみにまよふなる、おへをゝやのこゝろそはかなき。

(11ウ)

11 おもしろきもの

1 月の夜

かこつへきなみたは袖のよそにしてこゝろうかるゝ月の夜すから

2 雪のあした

冬きてもこゝろにたゝぬ花紅葉のおもかけうつむ雪のあけはの

3 花のさかり

おもひすてしうろかに春の心そむ(12オ) 花にはのりのみちも
わすれて

おもしろきたくひはかすくなれとも、おもしろからぬことの
葉にて、かきつゝけんはいかゝそや。さとれる人のねかふこと
もなく、すつへきこともなく、色にも香にもそみてそまらぬ心
にてよにあそはんは、何事もおもしろからすといふことあらし。
いとうらやまし。(12ウ)

12 心ほそきもの

1 無常の物語

よの人おほくは、無常のことはり、あたなるためしをきゝて、
けにはかなきは此身なりけり、けふありてもあすをまたす、一
日もあらんほところをなくさみ、よのたのしみをもなしたる
こそ、身のとくなれとおもへり。かへすくをへおゝろかなり。
よ(13オ)のたのしみとはなにことそや。食をあまんし、いろに
ふけり、物の音に心をよせ、家居つきくしく、ひとへに目を
よろこはしめ、みゝをたのしましめんとなり。これみなくなるし
みなることをしらす。いかなるわさも、しはしにてあかさるこ
とやはある。あきたらさる心には、かなはぬことこそねかふも
のなれ。たとひねかひえ(13ウ)たりとも、これはわつかの夢の

内、たのしみにてもあらはあれ、なかきのちのよはいかゝせん。
かくてもことはりすむものならば、のりのをしへはなにことそ
や。よのおきてのみならんか。まほろしの世に、あたなる身を
たすけんとの、ほとけのしへちひも、いたつらことなるへし。
ひしりの道もをへおゝろかならん。みつからたかきくらゐをゝ
り、ふうき柴花(14オ)をうちすてゝ、葉つみ水くみ、身をくる
しめしほとけも、我より智慧のたらしして、かくありしとおも
へるかや。よのたのしみにひかれて、なかき世のうれへい
にしつみはてなんこと、かなしみてもあまりあり。うらみても
猶うらめしき。さていかなるをかよしとする。このよりのち
のよまで、はかりなきたのしみあり。わか(14ウ)ころにおも
ひうる、をへおゝよはぬわれをうちすてゝ、ひしりのをしへに
まかすへし。さらば、火に入てもあつかからず、水に入てもうる
をはず、常にたえせぬたのしみ、うたかふことあるへからず。
はやく心をひきかへなは、そのほとにしたかひて、さとするたよ
りはありぬへし。是こそ人のいそかはしく、先つとむへきこと
はりなれ。(15オ)

2 すみかまのけふり

くゆりわひわれもうき世にすみかまのけふりをよそになかめ
ましやは

3 野辺のをくり

なきかけをしふの草のすゑの露もとの雫の身をしわすれて

4 老の寝覚

つれもなく見てしわかれものはるゝ老のね覚のあか月のそ
ら (15ウ)

5 とをくわたる舟の内

ゆくすゑはなにとなるとのをきもせず、ねもせて夜はをあかし
かた、うらみながらもこかれゆく、こゝろつくしのはてしなき、
うき身の旅のふねの内、こゝろほそさやまさるらん。

13 きゝたきもの

1 法のことばり

人はもとよりあめつちの霊にて、あし(16オ)き心はなきものを、
いつそのほにまよひそめて、まよひにまよひをかさねつゝ、
くらきやみ路にたとるを、えにしなれば、ひしりの道をもぎ
かす、とし月ふれば、したいへひによこしまなるにこりにそ
まり、いろにめて、よくにふけり、おほえすあしき人となる。
仏も、袖のうちに光ある玉をもちながら、むなしくうしなへ(の
ふと(16ウ)とけり。いかにして智ある人にちかつき、よのこと

はりをもわきまへ、もとのこゝろにたちかへらんこそ、身のさ
ちに侍れ。

2 あやしきものかたり

仏神のきとく、しゝたる人のまよひきたる、天狗妖化物のたぐ
ひは、きゝてもそのまことにつうせず、こゝろまよふものなれ
は、かたるをきくも、たゝし(17オ)き道にあらず。つねにめつ
らしからぬことに、おかしきふしもあるものを、しかれども、
人おほくよこしまなるをしへを信じ、おほきにまよふことあり。
さやうのものゝいふことをきけば、人しすれば土となり、けふ
りときて、なにかのこるへき、神も仏もなきものなり、やし
ろの内にかたちもなし、よのしめしはかりなり、といふを(17
ウ)まことゝこゝろえへぬ。されは、そのなきところこそ
あるものよ。今あるわれはなきものなり。かゝるをしへのある
折ふしは、あやしきことのものかたりも、せまほしきことにな
ん有ける。

3 いろこのみの物かたり

人のこゝろは、えんにふれてうつりやすし。さらぬたに、いろ
をこのむこゝろは、たれとてもふかし。老たるも(18オ)わかき
も、かたることなかれ、きくことなかれ。わきて、わかきあた
し心にて、よからぬ友にましはりて、かゝる道にひかれゆく、
こゝろのはては、このよものちのよも、なかきまとひのたねと

ならん。たとへ耳にてきゝ、目にふるゝことありとも、心にそむることなかれ。もし心をめぬれば、一たひは恋、一度はうらみ、えにしありてあふとても（18ウ）あかぬわかれに袖をしほり、うつろひやすきよの人の、こゝろの色のかはへわゝるをなけき、人のそしり、よのきこえをいとひ、いくとせ心をくたきつゝ、はてはかなき契りたにわすれぬ夢に、跡たゆる庭のむら萩うらかれて、人をも身をも秋風の、たちにし日よりかなしさは、いかばかりのおもひならん。夢の枕のうたゝねに、あひみんう（19オ）ちのたのしみに、むねのけふりはふしの山、こかれてたへぬつみとかを、かねておそれつゝしむへし。かりにもいろをおもふへからず。

4 古郷のたより

さすらふるうきはわすれて古里のたよりの風を身にはしむらん

14 さひしきもの

1 入逢の鐘

（19ウ）

さひしさにたへぬ夕へはよの中のをきをもしのふ入あひのかね

2 春のなかも

かなしさの秋もあるよとなくさめとしのふかたなきはる雨のそら

3 残るむしのね

あちきなく秋もすゑのゝむしのねに老のね覚の袖そつゆけき

4 猿の声

（20オ）

ましらなく山路をすくる夕暮はうきよりぬるゝたひのころもて

5 独ねの床

月みると枕もうときひとりねはそむきもやらぬ夜半のともし火

6 秋の夕暮

さひしさはたへぬなかも宿なれやこのさとかきる秋のたくれ

15 無益なるもの

(20ウ)

1 博〈薄〉突

よのしれものあつまり、はくゑきをなし、世のをへおきてをそむぎ、はてはけいにあひ、身をうしなふたくひは、むやくともいふにたらず。さなき人もかけわざをこのみ、圍〈ゑ〉碁すくろくうちて、月日をくらす人あり。よからぬわざなり。

されは孔子も、はくゑきのものたもなをやむにまされりと、学を(21オ)すゝめてのたまひしも、なかにはなはたにくめることはなり。さりぬへき人も、けしきかはりて、おとろくしく見え、つたなき本上あらはるるものなり。いとまなき身は、時をうつし、なすわざもそゝろに、かちてはよろこひ、まけてはかなしみ、むやくのわざに元氣をつい〈ゑ〉やし、やまひのもとゝなし、はてはあらそひいてきて、おもて(21ウ)をあかめ、のゝしりあひ、したしき中もあたをむすふ。ひとつとしてゑきなきこと也。昔、仙人のうちし碁は、いかなる碁にてやありけん。かりそめに見たる人たに、をのゝえのくちたるためしは、人けんのほかなればしるへからず。

2 老て世のましはり

おいへひゝたる人は、こゝろしつかにして、よ(22オ)のましはりをやめ、風月をなかめ、つえをたのみ、ひとへに後の世のつとめこそあらまほしかるへきに、見にくきすかたをまかへりみ

す、おいへひゝひかめるをもわきまへず、よをへつらへるゝふありさま、見くるしといふもをへおゝろかなり。もし又、よにすくれて、智恵かしこく、国民のたすけともなる人は、人ゆるさす、やむことをえすし(22ウ)てよをふるは、此さかひにはあらざるへし。

3 あふやけの政の善悪を論する人

徳もなく、才もなく、世にあはず、いにしへの聖の文、ところくよみ聞て、身のほとをもしらす、みつからこゝろたかふり、よをいきとをりて、をのかとちよりあひ、今の政にかゝることのありし、このことをへおきてはいかになどいひしろひ、かくあらんこそたゝしき道なれ(23オ)などいひそし、よをそしる人あり。これあみのめをかそへて、大綱をしらす、衣のすそを取て、ゑりをしらぬなり。わつかの智にていかてはかりしるへしや。さしあたりてよきとおもふことも、大きにさはるところあるへし。あしきとおもへることも、のちにはよのたすけとなることおほし。いにしへのみちなりとてひとへにもちゆるは、ふねにきさしてけんをもとめ、(23ウ)琴ちににかはへむするたくひならん。益なきのみにあらず、かへりては身につみをうへし。その位にあらざれば、その政をはからすところ、ひしりもいましめおかれしなれ。

16 すてかたきもの

1 一芸一能ある人

人はたゞ何事によらず、芸能を一つもゆへつけつへきことなり。其中にたとへすぐれたる芸能ありとも、おほ(24才)きにこゝろよこしまにて、人のそこなひになり、よのさはりとならんはいかにせん。おほかたのこゝろはへにて、をへおゝろかなるのみならは、世にすてらるゝこと有へからず。わかくさかんなる時より、ひとへに心をくたき、身をなけうたされは、その能をつくことあるへからず。何事によらず、すぐれたる芸能あらんは、よき代にはもちゐられすといふこと(24才)あらしかし。

2 ふるこよみ

大かたふるこよみは、世にすてらるゝ物にはすめれと、いつのとし、いつの日月、日の蝕にてありしなといひいて、そのほか月の大小、せつのかはりしりたきことあるものなり。まして易をかんかへ、れき道をくる人は、これをはなちてはなるへからず。よろつへすゝつへきもの(25才)はなきものなり。又、無用のやうといふことさへありとなん。

3 つれなき人

つらしとはおもひなからのはしはしらくちぬかきりはこひわたるへき

4 契りし人の盛過たる

なかくめこし花をこゝろにわすれねはあを葉ののちもよそにや
はみん

5 冬かれの野

(25才)

山里に人めも草もかれぬとてなかくすつへき冬の野辺かは

17 むつかしきもの

1 手ならひかくもん

むかしより、名たかき人のかきをきし文を見るに、手のつたなきは大かたなし。道のことはりにこそ心をとめて、あなかに、筆の道にはさまでこゝろはつくさるましとおもふに、をのつか(26才)よきは、理一分殊のことはりたかはすそ有けらし。又おさなきころほひより、一すちにならひつとめたるにやあらん、人としてたかきもいやしきも、まつものをかくに、手のつたなからぬは、いとこゝろにくし。むつかしとてすつへきことかは。さりぬへき人の、見くるしくかきなし、又は、えかかへらゝすなどいひて、人にかゝせなどするは、見をとりせられす(26才)や。もしは下さまの人、よみかきしらざるは、さても有ぬへし。世のかためとなり、つかさくらゐにある人の、人をおさむるはかくもんによるへし。さらすは、やみ路をたとるならんとこそ

おもほゆれ。又、うまれなからの智恵にて、すなをに、さいかしこく、何事もよにならひて、せいのまゝなるひしりは、昔もありかたき事にこそ侍れ。
(27才)

2 たひく物もらふ人

鳥あり、すをいてし子をともなひ、ゑをひろひて、子をやしなふを見しに、子とものあまりしけく餌をこひかゝる時は、いとむつかしきいろ見えてとひさりしを、猶あらすにしたひゆき、とひかゝりしを、はしにてをとしめける。鳥すらかくのことし。人としてかやうのふるまひあらは、しよくをこふもの(27才)にひとしくて、いとうとましからん。

3 用なき人のしはく来

よにときめけるあたりへ、なにの用なきにたひくまでくるは、へつらへるころにや。しかれとも、さきさまの心さしによるへし。およそ、とへかしとおもふに、とはぬはいとうるさし。みつから、花すゝきのほに出て、まねかはゆかんなどかまへたるは、へつらへるよりをへおとらん(28才)や。時により人によれば、かねていひかたし。たゞ我をたつることなくして、すなをよにましはらんは、意必固我のひとつのみはゆるされなまし。

18 いさきよからんもの

1 欲なき人の心

くもりなき鏡にむかへは、ものとしてうつらすといふことなし。人のころも、もとはあきらかにて、かたちなき(28才)ものなるに、いつそのほとにや、まよひそめていくへへえかきなるうき雲の、はれぬころとなりぬらん。いかにもして、もとのころに立かへらは、たえず此よに有明の月にひとしきけしきにて、天の道すなをに、人のころのわたくしなく、をのつからよくにくらめることあらし。

2 道にあたつて命をしまぬ人

(29才)

つねには智ありて、かしこけなる人なりとも、せつにあたつて命をおへしまは、みないつわりならん。いつれの道もきはへわまれるところは此さかひ也。

3 石川のなかれ

石川のちりもあくたもとゝまらてきよきなかれをせきなどゝめそ

4 庭に水そゝきたる

水そゝく庭の下草うちしめり(29才)空にしられぬ露そをきける

5 あつき日のゆふたち

こゝろまですゝしくなりてゆへいゝふたちに天のめくみを今
そしるらん

19 たのもしきもの

1 ふたこゝろなき臣

久しくその家につかへし人は、いふにおよはず、たとひへへ
一日なりとも、主君とたのみであらん人は、わたくしの身(30
オ)にあらず。ことにものゝふのならひ、主君の命にかはるへ
き身なり。つねにもこれをわするゝことなかれ。いたりておも
き命をさへすつへき身の、なに事にかそむくへき。わつかのう
らみに忠をわすれ、わか身の欲に恩をすてゝ、義にそむく人は、
人とやはいふへき。父よりも子よりもしたしからんは主君なり。
たれか我身をはこくむへき。わたくしの身を(30ウ)おもはず、
一すちにつかふるを、ふた心なきといふへし。ちかきころ、あ
る家に久しくつかへたる武士あり。たひくの軍に先をかけ、
功名いちしるく、名たかき人なり。しかれとも、その家にな
へおゝとらぬものゝふおほきゆへ、わつかのろくをうけてとし
を経しに、ある時、やんことなき国のあるし、その主君をまね
きて、せきをならへてもてなしいふやう、(31オ)わか国に一つ
の城あり、国のさかいにて、かたくまほらしめんとするに、さ

りぬへき将なし、公には代々武功ある人おほし、かの士をあた
へたまはりなは、おほくろくをあたへて、城をまほらしめんと
なり。もとより此人、なへての士卒を我が子のごとく、手あし
のこくおもへるなり。ことさら此人は、すぐれたる武勇の達
人なれば、わきてめくみふか(31ウ)けれとも、わけあたふへき
ろくもことたらすしておもひなから、年月をふる折ふしなれば、
さいはひとおもひて、やすくことうけて立かへり、かの人を
よひいたし、かゝることのあるなり、よろこひおもひて、いそ
ぎ用意あるへしとあるに、かの人さによろこひすして、なみ
たをなかりていはへわく、我久しく君につかへて、ふたこゝ
ろなく、身を(32オ)すて命をころんして、つゐにふかくなし、
なにことにみをとしたまへるにや、いまあたへたまはるろくを、
おしとおほして、かくはからひたまふらん、これよりよをのか
れて、るらへろゝうの身となり、のちのよをねかふへしといひ
て、うらめしきけしきなり。主君けうさめて、ともになみたを
なかし、ゆめくさにはあらず、わきて、なんちをふかくあは
へわれ(32ウ)みおもふゆへに、いとをしくはおもひなから、
おほくのろくのぬしとなし、しへなゝそんまてさかへさせんと
おもひてなり、さるこゝろはへは、今のよにはあるましなど、
とかくすゝめられしに、それはさもこそはんへらめ、武よの
家にむまれたるものゝ、二人の主君につかへきやうはしらす
とて、つゐにきゝいれす。ちからなくして、そののちかゝ(33
オ)ることなりとて、国のあるしのかたへ、こまゝといひを

くられけるとなり。むけにちかきことなり。此人かくもんなんともかつてなく、せいのみなるふるき人也。ふた心なき心はへは、かゝることにてやあるへき。

2 まことある友

よからぬ人のましはりは、あまきけのことしとかや。きのふはあつまりて、もの^(33ウ)くひ、さけのみて、ともなひめくり、けふはあたをむすふこととなり、はてはともにそしりあふ。その人、時にあひてにきはしければ、ふかきよしみをいひ、おちふれぬれば、めも見あはせずなりぬ。まことの友とは、たかひに義をすゝめ、すこしそむけることありとも、ともに見ゆるして、あらたむるにははからず、ことろのそこもへたてなく、^(34オ)ともにねかはんのちのよに、うかふもおへをなしはちす葉の、にこりにしまぬことろの友、まことにありかたき契りなるへし。

3 我か子の行末

木たかきかけにしけりゆく、さかへへえをまつのこすゑこそ、花さくこともなき人の、おいへひ木^(34ウ)のすゑのたのみなれ。人の子としては、身をたて、名^(34ウ)をあらはすは、孝のはしめとかや。その家をおこし、さかへを子孫につたへへえんこと、ことろの玉の光ならん。みかゝされはくもるへし。至徳要道とは孝の一字をこそ、孔子はをしへ給ひけれ。

4 病ある人よき医師にあふ

よきいしといふは、神農皇帝のむかしをしたひ、むなしきことろのもとをさとり、その家の学くらからすして、^(35オ)諸人の病をすくふこと、たとへは、仏のしゆ生をたすけ、聖のよをおさむるにことならず。やむことをえすして、薬をもちゆ、ひとへに慈悲をもととして、我か身をわするゝこと、よく武將のつはへわものをつかふにたり。しなくの薬は、士卒の得たるところにまかせ、機を見てとんにとりひしく病もあらん、やうやくに治する病もある^(35ウ)へし。あいきをさけてたきをうつ。神明の理につうして、ものとよくをしうつり、人の生死をわきまへ、すゝむへくしてすゝみ、しりそくへきをしりそかん。いのきのみやくなんといひて、その家に秘するときく。その門にいらされはくはへわしくはしらす。我道にたくへて、をへおしてしるせるものならん。かゝる良医にあひなは、いとたのもしくあるへきことなり。

(36オ)

5 よき夢見たる後

まことの人は、いねて夢見すとなり。よのつねの人は、いねてもさても夢ならん。これまよひのおもひよりむすへる夢としるへし。その心のたまゝまことにかへる折ふしはおほえす。つけの夢もあらんや。ひとへに我をはなれて、他人の身となり、鳥けたものに化したる夢は、道にちかき人の夢なるへし。むか

(36ウ)し、新田義貞は龍となりてふしたると見たるあした、あすわの城にてうたれしなり。北条の宗(家)雲は鼠となつて杉の木をかふると見て、大軍をおこして、鎌倉のくわんれい上杉をうつて、その家をおこす。もうこし我朝に、此たくひおほし。私は金鼓をゆめみ、孔子はうつはりのをれしを見て、きはまる運をしれりとなり。あふと見し(37オ)夢は、あはさる人にむすひ、うれいある夢のあしたは、よろこひきたる。又その人の心によりて、まさしく見つる夢もあり。さためかたきは夢ならん。たゝありかたきは、百年の花にとりしこてふの夢、さめにし人とやいふへけん。たゝまよふ夢こそかなしけれ。

6 恋のなかつた

わけいりし恋の山路にまよふ身は(37ウ)しるへの人やたのみなるらん

20 すさまじきもの

1 かみなり

雷といふものはいかなるものならんと、まちく(の)せつあり。絵にかきたるを見れば、おとろ(し)き鬼のかたちにて、雲ののり、車の輪のことく、太鼓をおほくつらねて、はちをもちてうちかけるさまなり。これいかなるせつ(38オ)にてやありけん、おほつかなし。又あるはかせのいへるは、陰陽の尅する時この

ひゝきあり。陽、陰をつゝみ、陰、陽をつゝむ、たとへは、かなへてものをにるに、を(へお)とあるかことし。水尅火とたゝかふゆへなり。かたちもこゝろもなきものなり。おちたる時、もし、かたちあるは、空をかけるいきものあつて、ひゝきにおちたるらん。これ、その日のあとによつて、そのかた(38ウ)ちに見ゆる也といへり。又ある人のいはく、かたちは陰にして非情あり、又有情にして、かたちなきたくひならんと也。我朝加茂の社に、わけいかつちの神をいふ。雲をおこし、雨をふらして、ここをみのらすは龍神なり。周易の乾の卦にかたたる、雲へんふしきの龍ならんや。いつれのせつもいはれあり。たゝ、これひとつのことほりなり。人間(39オ)の霊もおなじきものなるへし。人死して雷となりしためし、よゝにおほし。北野々神のいにしへ、又そのほかにもかすおほく、あまねく人しれり。源義平、新田義興これなり。国の政しゆんならず、天命にそむき、仏神をうやまはされは、神いかりをなす。天のいかりなりといへり。されは、もうこしの聖は、雷のなる折ふしは、いくわんをたゝ(39ウ)しうして、いろを変して、しつかに座して、おそれつゝしみたまひしと也。よこしまなる政にて、万民うらみをふくむ時は、しんゐのほむらもえあかつて、らいおほくなりひゝき、かしこゝにお(へを)ちかゝり、人をそこなひ牛馬をさく。又しつ火もえつき、民を(へお)くをやきうしなふ。そのほかよからぬことの変、さまく(なり)。天のなせるわざはひにあらず。人よ(40オ)りまねくと見えたり。おさまれるよに

は、天地をたやかに、寒暑往来時をたかへへえす、こくもよくみのり、よものうみ波風しつかにして、とくある人はすみ、悪人はしりそぎ、民のかまにときはへわふへし。

2 地震

それ地震は、日のもとの絵図とて見るに、龍のかたちのことくなる魚の(40)上に此嶋をのす、鯢といふ魚なりといへり。尾首はよりて、かしまの明神の下にあたり、かなめ石とて岩あり。此うをうこく時は、震ふるうといひつたへたり。さあるましきことといひかたし。かたつふりといふむしの、ふたつの角の上に、ふたつの国ありて、たかひにあらそひたかふと、莊子も文にかきたり。ねふへねむれるうちの枕の上、はか(41)なりなき夢をむすふ。さめてこそ非なるへけれ。このよとても、まほろしのさめさるうちのことの葉、なにをもつてまことせん。または潮のさし引、陰陽のめぐり不順なる時、木より土を尅するゆへに、うきふるふといへり。天をうみ、地をうみ、月日をうみし母は、そもいかなる神にてましますや。あきらかなる神靈は、色もかたちも(42)なきところにとまりたまひて、きたりもせず、さりもせず、よろつの霊のすみかならん。人の方寸のあひたにあつまりてもせはからず。こくうせかいもひろからず、人のこころのものとなるへし。誠にかなへは神あつまり、よこしまなれは悪魔やとる。是をおもへは、震しきりにゆることも、人のこころのとなるへし。

(42)オ

3 天狗のある

天狗といふものは、山にすむけたものなりといふ。さるものもあるへけれども、よにいへるは、魔を天狗といひならはせり。そもく天狗といふものは、さとしかたきものなり。あるひは山伏の姿にて、くちはしとかり、こくうをとひめぐり、大きな杉のうらにやとる。ある時は、里に出て人をつかみ(42)てゆき、さいけにほのほへをくふきつけ、人のこころに入かはつてとうしやうをおこさせ、風となり、雲となり、仏法王法をさまたくるものといへは、人おそれまどふ。中臣のはらひに、高つ鳥といへるたくひならん。又魔といふものは、もとよりあるものにあらす。人のこころかまなかしうなれば、これを魔といふ。心やはらき順なれば、魔といふもの(43)はなし。山にありて木をうこかし、つちくれをうかつはけたものたくひなり。みなはうへんのたとへなりと、いつれのせつも、にたることとはにたれども、まことをわきまへす。もとより魔しやうはころありて、かたちなしといへり。かたちなきにしもあらし、時にいたつてけんすへし。かたちはけしてさたまらず。山のおく(43)にも在家にも、ある時もあり、なき時もあり、人のこころよこしまにてまんなれば、来りやとる。みな人の靈魂のなれるものならん。かくちさいなるものなれども、魔道のしんるのほむらにて、日々に火しやうさんまいへひの、ほのほへをくにかると、なきところよりみれば、せかいとてもあるものか

は。世界なければ人もなし。人なければ天狗(44才)もなし。たゞ、まほろしのはけものなり。ある所よりみれば、世かいもあり、人もあり、天狗もあり、はけものもあるへし。ある所よりはなきはおこり、なきところよりあるは出たり。たゞ常住のほんたい、ふしやうふめつのことはりを、我も人も忘れたり。かたちは人にありながら、ある時は天狗もきたり、やとり、ある時はきちくもやとり(44才)てくるふなり。そのたくひおほければ、ともにくるふゆへに、とかむる人なし。きつねたぬきのやとりしをは、まれなるゆへに、人しりてものくるひとこれをいふ。そのたくひかはれはなり。たゞ本来そのまゝなる誠の人のよに出なは、むみやうのねふへむゝりをおとろかし、おもひしるへきよすかもあらんか。

(45才)

4 生霊死霊

男のりやうもあるものなれども、おほかたは女におほし。源氏物かたり、あふひの巻に、身をすてゝゆきやしぬらんおもふよりほかなるものはこゝろなりけりと、みやす所のこと葉とかや。かならずしも、りやうとなりてにくきものをなやまさんとおもふにはあらず。たへぬうらみのつもりおほえず、ゆきて(45才)なやませり。おもふこゝろのほかなりや。もとより、わかこゝろはゆきもせず、きたりもせず、あきらかなるものなるに、あくねんのまよひにより、身をすてゝゆきやしぬらんとならん。むらさきしきふはたゞ人にあらず。よくみなもとにかなひける

にこそ、もうねんのまよひは、へんけのすかたあらはるゝためしおほきことなり。されども、もう(46才)けなくたよりなきところへは、岩うつ波のをへおのれのみ、くたけて物やおもふらん、うくる人のこゝろにより、まほろしのすかた、あるともなしともいひかたし。こゝろは身をはなれず、こゝろゆけは、身もゆくへし。こゝにあれともかしこへゆく。つきたる人の身にあたれば、こゝにあれともその身にあたる。身も心もうつれるかけほんらいの(46才)心をすてゝなきものを、あるになせるまよひのはてこそ、すさまじけれ。

21 おくゆかしきもの

1 木立ものふりたる家居

なにとなく道をすくるに、木立ものふりて、すいかいのたよりおかしく、折しもやよひの比、いろことなる花咲みたれたるは、あるしもわかす、たち入てもやとおもはれ、おくゆかしきもの(47才)なり。おほかた家居のつきくしきは、かりのやとりといへとけうあるものなりと、兼好かかししも、けにさることぞかし。

2 琴のつまをへおゝと

ことの音にかよははわれも松風に身をしかへてもこすにいらまし

3 智徳ある人のをへおゝろかに見ゆる

わつかの芸能にても、学文にても、人(47ウ)にまされりとおもひて、いきほひもうにのゝしるは、あさましとこそ見ゆれ。かならず、ちとくある人はとくをかくし、智ある人は智をすてゝ、身つからえへゑたりとおもはず。なへて人はあきらかに、われはくらしとのみおもひて、をへおゝろかなる人になりたり。かれをもちゐてまかせなは、天か下をおさむるにかたしとせし。あしき世には見しる人な(48オ)し。されとも、をへおゝろかに見ゆるなかにも、をのつからとくの光あらはれて、おくゆかしきところみゆるなるへし。きりんはけたものゝわうなれとも、鼠をとることは、ねこ、たぬきにはをへおゝよはず。大鷹はすゝめをとることおろかにて、はいたかにはをへおゝとれるかことし。

22 あさましきもの

1 おちふれたるさすらひ人

(48ウ)

いにしへは、なにかし誰かしなといひて、ときめきしきはへわゝのむまこなれとも、時うつり世くたりて、おちふれはて、下さまの人にたちましは、こゝろまてかたくなに成けるにや、かけすけをされてみくるしく、よろつわひしけなるこそうたてけれ。さすか、そこはかとなく、なまめかしきかたにうちましは

は、みやま木の花さかねとも、そ(49オ)の木すゑとおもはへわゝれて、いたましくも見ゆへし。されは、せんそのほまれなど、人にまされりなとおもはゝ、よのつねの人より猶をへおゝとりなん。もしさるへき本上ならましかは、めくみたきことなり。むかしは、その人の家にみやつかひせし人の、すぐせよくてよにときめき、すけなくふるまふこそかなしけれ。あふきめくむまで(49ウ)こそなからめ、けつくおとしめあなとなるなど、よにおほし。いとあさまし。

2 廃処におもむく人

をへおゝかせるつみありて、なかざるゝはいかゝせん。もしは、おもはざるほかに、はいしよにおもむくは、むかしをきくさへあはれなり。したしみなれし妻や子に、いまわかれては、又いつのよにあふへきとおもはれず。行末つらきふねのうち、う(50オ)きにたへせぬなみたのうみ、しつみもやられてこかれ行、うき身なからもなからへて、あやしき嶋にすてられ、にい嶋もりとなりはてん。もし又、道をさとする人なりせば、うんをしつてなけかす、あるよをたにもすつへき身のさいはひとおもひとることもあらん。さらぬ身は、いつくにさまよふとも、猶さめかたき夢のよに、まどふこゝろ(50ウ)そいたはしき。

3 からき政の国にすむ民

国をたもつ人は、民をめぐみやしなはんためなるへし。上老人

のころ、天理の誠にとまり、なすことなくておさまらん。やまひなき人には、あたふへき業なし。おほきなる国をさむるは、せうへしやうせんをにるかことしと、らうしもときをかれしなり。四つの時めく(51)なりてやます、月日は夜昼かはりてらし、ころありや、ころなしや。いにしへの聖は、とくよろつよにほとこせとも、おんたくともおもはず。おさまれるよの民は、あくまでくらひへい、あたゝかにきて、上のめくみをもしらず、はらつゝみをうつとかや。すゑのよといふとも、をのつからなるのりあれば、ちからをもいれすして、よのおさまらん(51)ことは、君と臣とのころなり。しかるに、ひとたひその家にむまれ、又は武略の功によつて、その国をしるといへとも、そのころをへおこりて、ほしむまにふるまひ、天命をそむき、神や仏にはなたれ、その家をうしなふこと、ためしおほきことなり。この日いつかほろひんと、なけきし民こそあさましけれ。

(52)

23 えへゑたきもの

1 財宝

たれとても、財宝をこのまぬ人がある。しかはあれとも、義にそむき、道をまけてこのむは、りよくにくらむ人なり。あるひはへつらひへい、あるひは人をはかり、うけましまひなひをうけ、したしきなかにもあらそひ、はちをすてむさきほるた

くひは、人とは(52)いふへき。それ人のたからは、命にきたるものやはある。かゝるたからなれとも、君のため親のため、又志すへき道にあたつて、のかれにくる人やはあるへき。それよりかろきたからにまよひて、道をそむく人もあり。をのつからさいはひありて、財もあつまりなんは、天のあたへなれば、欲とはいふへからず。それをもよろこひすし(53)て、金をは山にすて、玉を淵になくする人は、ありかたきひしりなれば、をへおよひかたきところなり。一人のふかうをころして、天下をもえへゑしと、かしこき人のいひをへおきしこそ、人のかゝみならめ。おほくのろく、うすたかき財なりとも、ひとつの道をそむき、義をまけては、いかてうへき。ろく、たからよりおもきたからは、我にあり。財は(53)つくることあらん。道の宝はくちすへからず。わつかのよくにくらみ、おもきたからをうしなふ人は、夏のむしの火に入よりをへおろかなりとこそおほゆれ。

2 智徳ある臣

舜は皐陶をあげ、文王は太公望を得て、武王のよにいたつて、天下をへさむ。たゝ得かたきは人なるへし。ちかきあ(54)たりはいふにをへおよはす、とをきみ山の奥、たきをこるそま人、又はなきさに釣をたるあま人、おきなさひたる人までも、たつねまほしき人は人也。千さとをかくる馬はあれとも、よにはくらくなしと、かнтаいしかいへることく、人を

しることかたしとかや。されども、すゑのよには、千里の馬もはくらくもあるへしとおほえす。(54ウ)もし、千里馬あらは、いつくのうらにありとも、とくのひかり、をのつかれてらさすといふことあるまし。見しる人なしといふとも、人のこゝろにかんし、つゐには雲をおこし、とひいつる龍ならん。時いたらされは、田にふして、いもりなんとのあなとることもありなん。よにかたましき人の、いにしへの文、かたはかりまなひて、身のほと(55オ)をもわきまへす、我は千里の馬なりとほこりて、よをいきとをるこそをろかなれ。もしもちゐたらましかは、ろはのあゆみにをへおゝとるへし。これ夏のむしの、氷をしらぬたくひなり。ひとへに君のこゝろすなほへをゝにして、慈悲ふかく、はんみんをあはれみたまはゝ、そのよにしたかひて、かしこき人はすゝみ、あしき人はしりそかん。みなか(55ウ)みたにもたゝしくは、鳩もけして鷹となり、鼠も虎とならんかし。火はかはく所につき、水はうるほへをゝふ所にいたる。をのつからの道ならん。

24 久しきもの

1 仙人のよはへわゝひ

仙人といへるは、まことの人のきはへわゝまりなり。あるひはその道をつとめ、あるひはくすりをなめつゝ、此さかいに入といふも(56オ)ろこしにも、我朝にも、そのかすおほし。此みちにな

ひては、むまるゝこともなく、死するをへおゝはりもなし。かたちは老ぬることもなし。月日に光をましへて、あめつちはをへおゝはるとも、その身はかはることもなく、六かうの外にあそんで、なすことなくて、つねにたのしみり。ねかはしきところなり。そのさかひにいりなん人は、鬼のたゝりも(56ウ)なく、人のせめもあるまし。をへおゝよひかたしとおもふへからず。はんりをゆくも、一あしのあゆむこゝろのうちなれ。生々世々のあひた、まんかうをへすして、つゐにいたらすといふことあるへからず。

2 鶴

おさまれる御代は千とせもかきらしな霜をかさねんつるの毛衣

3 亀

(57オ)

あそふらんかきりしられぬ岩ほかなうこかぬ君かよろつへすゝよの亀

4 おさまりたる代

そもく三つの国のおさまるもとをあんするに、天竺は西方北方によりて、陰の国なれば、金水をもとゝして仏法なり。水のたいは如来也。人のこゝろも陰氣にしてよく此法をたまつ根の国の水のなかれ、みなうるほへり。(57ウ)震旦は中の国、人の心かたよらず、心順にして、仁義のみさはまほり、その中を

とつて、よくつねをまほる、これを儒といふ。すなはち孔子のをしへなり。我朝は日の本にて、東へよりて陽の国なるゆへに、神の道をまほる人の、こゝろたけく、陽神の光にまかせて道にかなへり。みなこれ一たいの天理にして、やうはことなるにたり。されは我国、天の(58オ)みはしらたちそめ、あまてる御神しろしめしてより、五代は神の代。人の代となりても、神代の道つたはり、国とみ民ゆたかなりし。欽明天皇の御代に、仏經わたりそめ、そのうち聖徳太子きえしたまひ、仏像をつくり、寺をたて、もりやをもつてことくその法をへおこなはる。いまのよまでさかんなり。それ火は順にし(58ウ)ては、ものをやしなひ、すくればものをやふる。陽さかんにして過なんとする末の代にいたつて、陰をくはへてをへおきなへのふこと、いちしるきことはりなれば、をのつから時になひ、陰の国の仏法、此土へわたり、国のおさまるたよりとなる也。聖徳太子はもとより、ひしりのとくなれば、ことはりといふもをへおろかなり。又、日本は東也。春をつかさとり、(59オ)生々の氣にあたるゆへに、むまるゝ人はかさなり、しする人はすくなし。されは哥にもあめのます人とよめり。このゆへに人民したひにおほくなりて、こくもふそくにして、ひろき国なれとも、身をおくさにまよふ沙門のかいきやう、子孫をたち、よのたすけとなること、ありかたきちかひへいなり。震旦の儒もわつかにもちゆる人あり。(59ウ)これ又、五常の道、人輪のまことなれば、神の光をそふ。いつれの道、いつれの法なりとも、人

のこゝろすなほへをになし、よのおさまらんにおめては、神代の道はかくるゝとも、神はうれしくおほすらん。神代のむかしはいざしらす、神武より此かた、なかはおさまりし代といへとも、いまたよくとゝのをらす。いまあたる代のおさまりしこと、(60オ)はつかうはたなこゝろのうちにして、とをき嶋く、人の国までなひきしたかひ、そのいにふくせすといふことなし。これあきつすのはしめ也。民のかまとのけふりにきはひ、はん歳をよふこゑ耳にみち、かきりしられぬ此御代にむまれあひぬるよろこひ、なにことか、これにしかんや。

(60ウ)